
ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

ジンダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

【Nコード】

N9388Y

【作者名】

ジンダイ

【あらすじ】

舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イツシュの五つの地方からなる世界。

そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しずつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。

この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

プロローグ(前書き)

初投稿です。

プロローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、
転世界。

そこにいる2匹のポケモン。

体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもついでんしポケモンのミュウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まってしまおうのか…」

ギラティナがため息を吐きながら言う。

ミュウツー「戦いは、復讐は何もつみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」

ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやってくればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這ってきた。

????「帰ったぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんどくポケモンのダークライ。

ミュウツー「…どうだったか」

ダークライ「シェイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れていると…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言っていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ」

ギラティナ「すまん…皆の説得を任せて…」

ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行ってくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミュウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」

ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会うことすらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」

ミュウツー「…そうだな」

ミュウツーはそう言うと、そこらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミュウツー「私は前回の戦いには参加していなかった…もう戦いはうんざりだったからな」

ミュウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には無人島が写っていた。今だにかたづけられていないガレキがちらばっている。

ミュウツー「しかしもう私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」

ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴挙を止める」

ミュウツー「そのためにも、今はダークライを信じよう」

ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれば…皆もやめてくれるかもしれないから…」

そして同じ頃、ある村で運命がうつごきだした…

ブログ（後書き）

ふーやっと終わった〜途中で意味分かんなくなって3回ほどきえちやったよ、本文。

さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。感想を書いてもらえれば嬉しいです。どうかよろしくお願いします。

6月3日 ポケモンが貰える日(前書き)

第1話 よう～～～～～～～～～～やく始動!!!な……長かった……
軽く3、4回ほどきえたよ……本文……

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ナオヤ「準主人公と言っしてほしいね」

一緒じゃん。

ナオヤ「ハア、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ」

(カチン) それ、本気なのかな？ナオヤ君？

ナオヤ「本気に決まってるじゃないか」

フーン (ニヤリ) じゃ、本編スタート!!!!

ナオヤ「何言ってたんだ？作者は？」

6月3日 ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。朝、この島のひとつの民間で少年が眠っていた。

少年「ZZZZ…」

お母さん「コウタ〜朝よ〜起きなさい〜」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

コウタ「ん…ん〜もう朝か…眠む」

少年…コウタは眠そうに目をこする。

お母さん「今日は6月の3日でしょ〜いいの〜」

コウタ「なぬ!! そうだったのか!!? 僕としたことが…今いくぞ…!!!」

コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。

この村では、10歳以上の人は今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

コウタ「リビングに到着!!!」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね〜いつもとは大ちが…」

コウタ「いただきますごちそうさмайってきますダツガチャドガ

ツバタツ」

コウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のコウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「コウタく気をつけて行ってらっしゃい」

お母さんは玄関であった事に気づいてないようだ。

コウタ「痛って…おい！ナオヤ！！危ねえだろが！！気づけるよ！！」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろが！！！！」

この少年はナオヤ。コウタの幼馴染みであり、親友だ。

???「全く…二人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくnゲボホッ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまった。

メイ「だくれが乱暴凶悪女って？」

この少女の名前はメイ。二人の唯一の女友達だ。というより、この村では10歳前後の少女は1人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど二人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちゃんと正装でいかなきゃ」

そう言って、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちつ、年下の癖に」

メイ「なんか言った？（怒）」

ナオヤ「いえ何も（汗）」

ナオヤは昨年の6月後半、メイは一ヶ月前に10歳になったので、コウタとナオヤの方が年上なのだ。

コウタ（メイって将来、ずっと黙ってたら絶対モテるよな…）

メイの事を密かに可愛いと思っているコウタは、ナオヤがボロボロにされているのを見ながらそうおもった。

メイ「じゃっ、あそこのぼろ雑巾はほっというて祠に急ぎまじょうか」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「……………グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになっているナオヤだが、どうせいつもの事なのでコウタはほうっておいた。

メイ「ねえ、コウタ？最初のポケモン誰にするの？私はリリーラとホエルコがいいな」

ナオヤ「俺はアノプスとジーランスがいいZ E」

コウタ（いつもながら復活早）

メイ「黙れ、社会のテスト*点が。（点数はある人物の要請により削除）」

ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつつくのはやめようか…そのテ

ストは頑張つて追試でとりかえしたし……」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に二人は先に行つてしまった。

ナオヤ「おい！まってく「グボハツ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかった。

6月3日 ポケモンが貰える日(後書き)

ナオヤ「オイ！作者！！」

んゝ、何ゝ

ナオヤ「何だよ！あの俺のあつk……」

ネタキヤラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！！？」

じゃあ、また今度。 ダツ！！

ナオヤ「あつ、逃げられた……」

さあ、いざ祠へ！！（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロサーステイが、ぼやきながらGENT
Sの続きを書いております。

コウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょ、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

コウタ「え！？そうなの！！？」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと7
1点上がったという奇跡を起こした人でもある。

ナオヤ「要するに、俺はすごいんだな」

いや、71点上がったということは、その前は29点以下だった
ということだよ。（しかも上がっても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロサーステイ「うるせえ！！！」

！！！
ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート！

さあ、いざ祠へ！！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

コウタ「うーん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで「最初のポケモンは何がいいですか」っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタったら…」

一応、この村にもトレーナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

コウタ「あつ、見えてきた」

コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！！？」

メイ「コウヤさん!？」

コウタ「コウヤさんが祠まで連れて行ってくれるんですか？」

この男はコウヤ。ナオヤの兄である。けっこうチャラくて軽い性格だ

コウヤ「おうよ！いけ！！ジーランス！！！」

コウヤのモンスターボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。

ジーランス「じら〜」
ユウヤ「さ、みんなこれに掴まってくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。

そして4人はジーランスに掴まった。

ユウヤ「行くぜ！ジーランス、ダイビング！！」
ジーランス「じらっ！！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、3人を包みこんだ。

バシャン

4人はジーランスと共に、海底へとむかった。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボ！！！！……」

コウヤ（あれ？そういえばジーランスって4人も連れてダイビングできたっけ…）

祠の入り口

ナオヤ「げほっ、げほっ、げほげほげほっ」

ユウヤ「悪いい、ジールランスは3人乗りだったわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちつとも反省していない様子で謝る。

メイ「さっ、行くわよ」

コウタ「うん」

ナオヤ「俺についてはノーコメントですか…」

そして4人は祠の奥に向かってあるきだした。

さあ、いざ祠へ！！（後書き）

短くてすみません。時間ないんで。

そして、皆ナオヤの事はスルーして話を初めた。

村長「では、儀式の内容はわかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！！！」

ナオヤ「……………ハ……………イ……………」

まだナオヤは大丈夫なようだ。

村長「まず、儀式の内容を確認する。最初にホエルコ又はジークラスを選び、受けとる。そのあと、儀式を行いもう1匹のパートナーは、アノプスカリリーラかを決める。わかっているな？」

メイ、コウタ「ハイ！！！」

ナオヤ「OK！！！」

コウタ（復活早……）

この村では、最初のポケモンがキモリ、アチャモ、ミスゴロウのホウエン初心者用ポケモンではなく、世界の中で野性がここにしか生息していないアノプス又はリリーラ、この島から旅立つために必要な技、なみのりを覚えているホエルコ又はジークラスなのだ。

この島の周りは激しい海流が流れているので、船がとおれず、ポケモンでいくしかないため、ポケモンリーグはこの辺りの島から旅立つトレーナーのみ、ジムバッチ0個でもなみのりを使うのを認めている。

村長「やり方は、まず自分の旅の目標を書いた紙を祭壇の火に投げ入れる。そしてその紙が燃え尽きるまでの時間でパートナーを決める。これもいいな？ では、今から儀式を初める。まず誰から？」

ナオヤ「ハイハイハイ！！！！俺から行きます！！！！」

コウタ「あつ、抜け駆け……」

メイ「まったく……」

ナオヤは早速、紙に旅の目標を書き炎の中に投げ入れる。

ナオヤ「行けえい!!」

それと同時に村長はストップウォッチで、炎の中の紙がどれくらいで燃え尽きるのかを測る。

そして、1分位した後、紙は完全に燃え尽きた。

村長「え〜と……今のタイムから……ナオヤ、君は、………」

村長は何やら名簿の様なものをみていたが、口を開いた。

村長「アノプスだな」

ナオヤ「イヨツシャアアアアアアアアアアアアアアア!!」(ドヤ顔)

ナオヤは自分の欲しかったアノプスが選ばれ、思わずドヤ顔をしたが、

メイ「キモイ」

コウタ「それは……ちよつと……」

ユウヤ(プププ、バツカじゃねえのか、こいつ)

村長「………」(失笑)

うけなかった様だ。

ナオヤ「………」(泣)

メイ「さ、しょげてるやつはほつといて私の番」

メイが張り切って儀式をしている間、コウタは壁の凹凸を触っていたコウヤに、気になっていたことを聞いた。

コウタ「あの…コウヤさん…」

コウヤ「ん、何だ？」

コウヤは壁から手と目を離さずに答える。

コウタ「どうしてこの村には、こんな儀式があるんですか？」

コウヤ「この儀式が発祥した訳か？」

コウタ「はい。何か知っていますか？調べたけど何処にも書いてなくて」

コウヤはやっと壁から目を離して言った。

コウヤ「悪い、俺も知らん」

コウタ「そうですか…」

コウタは少し、がっかりした様子だ。

コウヤ「そもそもこの儀式自体、あまり意味ないしな」

ナオヤ「どうゆうことだ？」

いつの間にか復活していたナオヤが聞く。

コウヤ「実は最初のポケモンは、みんなもう決まってるんだ、スクールのアンケートで。この儀式は形だけだよ」

コウタ、ナオヤ「……………」

二人は絶句する。

コウヤ「この事は、なるべく秘密にな」

ナオヤ「……………なんで、こんなまわりくどいことするんだ？」

コウタ「伝統だからだろうね……………」

その時、メイが儀式を終わらせて戻ってきた。

メイ「お〜い、コウタ〜ナオヤ〜 私はリリーラとホエルコになったよ」

コウタ「う、うん。」

ナオヤ「よ、よかったな」

もうポケモンは決まっていたということを知ってしまった二人は、複雑な気持ちでメイにこたえる。

メイ「？二人共どうかした？」

コウタ、ナオヤ「いつ、いえ、何でもありません！！！」（汗）

メイ「そう？」

慌てていた二人をメイは疑わしそうに見ていたが、ポケモンをもらったことで機嫌が良いらしくそれ以上何も聞かなかった。

コウタ「次は僕の番か……………行ってくる！」

ナオヤ「お、おう。」

メイ「行ってらっしゃい。自分の好きなポケモンが貰えるといね」

その言葉を聞いた二人は、また複雑な表情になる。

コウタ「う、うん…そ、そうだね」(汗)

ナオヤ「アハハハハハ…」(汗)

メイ「本当にどうしたの？二人共？」

コウタ、ナオヤ「いつ、いえ！！本当に何でもありません！！！」

(汗)

メイ「？」

キョトンとしているメイの横を走って通り過ぎ、コウタは村長の元へ向かった。

村長「では、今からコウタの儀式を初める」

コウタ「ハイ！！！」

コウタは紙を受けとると、早速かきはじめた。

コウタ(あれ？僕みたいに欲しいポケモンの名前をはっきり書いてない時はどうなるんだろう……)

コウタは書きながらそういうことを考えていた。

ユウヤ(はっきり書いてない奴は、村長がどっちをやるのか決めるんだっただな…コウタはどっちになるんだか)

そして準備が完全に済んだコウタは、紙を炎に投げ入れ、その紙は燃え出す……

はずだった。

紙は炎の中にはいるも、すぐにそこから真上に飛び出し、しばらく空中をまっただあと、村長の後ろにある石板の上に乗ってしまった。

村長「ま、まさか……こんな事が本当に!?!?………」

村長はかなり動揺している。

コウタ（あちゃ〜しくったかな…）「すみません、もう一度やり直します」

コウタが石板に手を伸ばし、紙を取ろうとしたのだが……

村長「やめるコウタ!!!お前のパートナーはもう決まった!?!?!」

半分取り乱している村長の声により、中断させられた。

コウタ「どうゆう事ですか?」（アノプスカリリーラどっちだろ…）

村長「……お前のパートナーとなるポケモン達は…この中にいる」

なんとか落ち着きを取り戻した村長は石板を指差す。

コウヤ「一体その石板の上に紙がのったらどうなるんですか?村長」

ナオヤ「この石板がポケモンなのか？」

兄弟で村長に問う。

村長「いや、正確にはこの祠の奥に封印されているポケモンだ…
儀式の紙が石板の上のつたということとは…まさか代々伝わる、
儀式の元になっている話が現実になるなんてな…夢にも思わなかつ
たことだ」

コウタ「一体なんの話を…」

村長「コウタよ、こちらにこい…今から石板の封印を解き、お前の
ポケモンと会わせる…お前は守護神に選ばれしものだ…」

運命の齒車は加速を始める…この少年達と守護神と呼ばれるポケ
モン達との出会い…そしてまた、別の出会いにより…
運命はもう、止まらない。

伝統の儀式（後書き）

コウタ「で、結局僕のポケモンは？」

それは秘密。

コウタ「まあ、いいか。どうせ次わかるし……」

分かんないよ。

コウタ「分かんないの!!!??」

だって次回とその次の話では、君達の出番はないし。

コウタ「じゃあ誰がでるんだよ!?!」

今回は新キャラが出る、とでもいっておくよ。

コウタ「次の次は？」

いや、流石にそれは言えないね。

コウタ「……………どうしてもダメですか？」

うん、ダメ。

コウタ「じゃあ僕にだけ」

しょうがないな〜 ゴニョゴニョ

コウタ「えっ！？あいつが!!」

そだよ。じゃあ今日はこの辺でさよなら

コウタ「唐突におわったな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9388y/>

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

2011年12月1日01時50分発行